

# にしっこ 西っ子のみなさんへ 41

8月26日

日本人なら誰もが知っている「金魚」。夏の風物詩であり、夏祭など夏のイベントにおける「金魚すくい」は、日本文化のひとつといってもよいですね。

金魚は、1700年ほど前の中国の長江で、野生のフナの仲間から突然変異で現れた「赤いヒブナ」が始まりとされています。その後、宮廷で飼育されるようになりました。

尾びれの改良などが進んで徐々に華やかな姿へと進化すると、金運をもたらす魚として「金魚」と名付けられました。飼育がひかなくて簡単であるため、現在は世界中で親しまれています。

金魚は、もともと自然界には存在しなかった魚で、偶然生まれたものを人間が手を加えて創り出したもので「生きた芸術」とも言われます。



日本に入ってきたのは西暦1502年、室町時代末期の大阪です。今で言う「和金」と呼ばれる金魚の形に近いものだったようです。当時は高級品で、一部の貴族の間でひそやかに話題になりました。

その後、日本ではいったん姿を消しますが、江戸時代に再び日本に持ち込まれ、現在に至っています。はじめは特権階級だけが楽しむ贅品であった金魚ですが、養殖技術が発展し、徐々に普及しはじめます。江戸中期になると、藩士が副業として金魚養殖を始めるようになり、大量生産されるようになると価格は値下がりし、またたく間に庶民に広まりました。

金魚は、もともとは池で飼育されていましたが、やがて、水鉢で飼って楽しめるようになります。当時はガラスでできた金魚鉢がありませんでしたので、陶製の器に入れて上から見るのが主流になります。これを「上見（うわみ）」といい、金魚の正しい鑑賞法となりました。

金魚が泳ぐとき、尾びれが花開くように見えます。金魚の最大の見どころは、この「尾びれの揺れの美しさ」といわれます。



国内の産地はいくつもありますが、この近くでは、愛知県の弥富が有名です。日本の金魚全26種類が揃う産地です。